

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0491100103		
法人名	株式会社 アイ・ケイ・サポート		
事業所名	カーサ岩沼 グループホーム いぶきユニット		
所在地	宮城県岩沼市中央3丁目7-16		
自己評価作成日	令和 4年 1月 10日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	令和 4年 2月 7日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

コロナ禍にあり、いつでも外出できるという環境でないことや、面会制限なども原因の一つと思われますが、身体機能や認知機能の低下などが現れた方が見られました。医療機関と連携し、入居者の皆様がいかに生き活きと生活を続けていくことが出来るのか、考えながらケアをしています。薬に頼る前に出来る事はないか、まずはケアの見直しから行うようにし、その人らしさを失う事なく、安心して生活出来る環境作りを目指しています。未だコロナ禍にあるため、感染予防にも力を入れ、心身共に穏やかに生活して頂けるよう努めています。当施設では看護師と24時間連携が出来るという利点を活かし、ご希望があった場合には看取りも行っております。ご本人やご家族の希望をケアに反映させ、心に残る看取りとなるよう、また、住み慣れた場所で穏やかに最期を迎えるためのお手伝いをします。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

JR岩沼駅から徒歩7分ほどの市街地に7階建ての高齢者複合施設(有料老人ホーム、デイサービス、訪問介護、居宅介護支援事業所)の2階にホームがある。感染防止に努め、市内の公園への花見や近郊のドライブで入居者の気分転換を図っている。「事故・虐待防止・身体拘束廃止委員会」を毎月開催し、入居者の安全確保に取り組んでいる。職員同士仲が良く、何でも相談できる環境を作っている。職員は明るく優しい声がけを基本に入居者のケアにあたっている。目標達成計画の「災害時のフローチャートの見直しと職員連携」は達成し、「家族へブログを印刷して届ける」は、今後も継続して取り組むとしている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができて (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 ○ 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで身体や精神の状態に応じて満足出来る生活を送っている。 (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、やりがいと責任を持って働いている。 (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者の意思を出来る限り尊重し、外出等の支援をする努力をしている。 (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、医療機関との連携や、安全面で不安なく過ごせている。 (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

2.自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 カーサ岩沼グループホーム)「ユニット名 いぶき 」

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念作成にあたり全職員の意見を反映し、ユニットと事務所に掲示している。常に目に付く所に掲示する事で意識付けを行い、サービス向上に努めている。	ホームの理念「入居者様の気持ちを尊重し笑顔と優しい言葉で接します」を令和2年12月に職員全員で作成した。イライラした時等理念を振り返り、自分が介護される立場に置き換え、ケアに努めている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍にあり、入居者が地域とのつながりを持つことは難しい状況だが、運営推進会議により地域の活動を知る事で、参加出来る機会を模索している。	町内会に加入しているがコロナ禍のため、地域主催の夏祭りや敬老会等の行事は全て中止となっている。ホームと社協共同のカフェも中止している。職員は自主的に毎月清掃活動に参加し地域参加に励んでいる。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍にあり、外部との関わりを積極的に行う事が出来ない事で認知症高齢者に生じる弊害があるという事実を、運営推進会議などで発信し、情報を共有し、出来る事に最善を尽くしている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍で入居者の参加は自粛しているが、会議開催時には事業状況の報告、行事活動の報告を行ったり、家族様や地域包括支援センターや介護福祉課等の意見を聞き、情報交換を行い、良好な事業運営に努めている。	2カ月毎に年6回会議を開催している。うち2回は書面による会議となった。メンバーは町内会長や民生委員、家族、入居者、市職員、地域包括職員である。サロン開催の案内があったが参加は見合わせている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	コロナ禍という事もあり、行政との連携は欠かさない状況。最近管理者が変更となったことや、コロナ禍で積極的に外出が出来なくなったことで身体機能の低下等が見られた入居者様についての相談などを行っている。	市職員からワクチン接種の状況や認知症カフェの情報があった。地域包括センターから介護教室講師の依頼があった。市の担当者に入居者の夜間の暴力行為について相談し、2人体制にして今は落ち着いている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	施設として「身体拘束排除宣言」を表示し、職員にも周知されている。「身体拘束廃止委員会」があり、廃止に向けた取り組みを行っている。年2回の研修会も行っている。	身体拘束廃止委員会を毎月開催し、身体拘束チェックシートでの確認や事故報告等を検討し、議事録を職員に回覧し周知している。グレーゾーンな言葉使い一覧表を職員トイレに貼ってある。「ちょっと待ってね」や「どうしたの」等は使わないようにしている。		
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事故・虐待防止委員会で話し合いを行い、虐待についても、委員を中心に啓発活動を行っている。ユニット内に虐待の注意喚起のため、声掛けの一覧表を掲示したり、注意が必要な声掛けを聞いた時には、すぐに指導する事になっている。	虐待防止の研修会を年2回開催し、虐待とは何か事例を上げ、虐待の弊害や背景予防などを学んでいる。自分の手をたたく入居者にアームカバーで保護したり、「ちゃん」付で呼ぶのはダメなど、防止に取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用している入居者様もあり、月に一度のミーティング等の機会や内部研修会などの際に周知している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約担当者は入念に内容を読み込み、契約に至るまで、パンフレットや料金表などを用いて説明を行い、入居までの流れと入居してからのことを理解してもらい、契約時には更に詳しい説明を行っている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議を通して意見を聞き、ケアに反映できるようにしている。コロナ禍にあり、家族の来設が少ないため、こまめに状態を伝える連絡をし、要望なども聞くようにしている。毎年2月に家族向けアンケートを実施し、意見等を抽出している。	家族アンケート(スタッフの対応・ブログ・改善してほしいこと)の結果、「入居者の様子を知らせて」や感謝の言葉があった。「歩かせて」の要望に、移動時は車いすを使用せず、2人介助で歩行を支援している。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年1回、社長面談を行っており、不安や不満、要望などがある職員が意見を言える環境を作っている。改善できるものに関しては管理者会議などで決議を行い、反映させている。	職員の要望に応じて寝台浴を導入した。入浴介助の負担軽減になった。夜勤回数を減らしたり有給休暇をシフトに入れ、要望に応じている。外部研修への参加は、コロナ禍で見合わせている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課を取り入れ、職員の向上心を高める事に力を入れている。これまでは幹部のみで行っていた賞与額の査定に、職員をよく観察出来る立場にある管理者も加わるようになり、適正な評価が出来るようになっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月、内部研修を行い、出来る限り多くの職員が参加するよう促している。職員の個々の能力や経験年数を考慮し、キャリアパス制度に基づいて評価し、スキルアップ支援制度の利用も促し、積極的に学ぶ機会を作っている。		
14	(9)	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍で外部同業者との交流は難しい状況にあるため、現在は内部の他事業所との交流を行っている。月に一度のリーダー情報連絡会では全事業所のリーダー達が集まり、情報交換を行ったり、機械浴を合同で行うなどで交流している。	法人内のデイサービス、グループホーム、有料老人ホームのリーダーやPT、OT、看護師等が参加し毎月会議が行われ、リーダーの役割など話し合っている。導入した寝台浴の使い方や使用の日程調整を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	実態調査の際にご本人から意向などを聞き、入居前にもご本人に再確認したり、家族様からも意向や要望等を確認している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込みや見学に来た時点で現在の状況を確認して初期段階の信頼関係を構築し、更に実態調査時にご家族の意向・要望などを確認している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	見学、相談に来た時点で、ある程度の情報を聞き、適切なサービスをアドバイスしている。その上で、入居前には詳細なアセスメントを行い、対応を考えている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員と要介護者は対等であり、上下関係で成り立つものではないことを、研修などで発信している。一緒に家事やレクリエーションを行う事で、共に過ごす時間を大切にしている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍にあり、家族様が自由に面会に来ていただく事が出来ない状況だが、だからこそまめに連絡をする事で家族様に現状を知ってもらい、入居者様本人のことを一緒に考えてもらい、共に支えていく関係を築いている。		
20	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	現在は外部との関わりを行う事は難しいが、本人宛の手紙やハガキが送られてきたら、職員が読んでさしあげ、入居者様本人と手紙の送り主についての思い出話などをする事がある。施設内で検討し、一時的に面会が出来る時期を設け、会って頂くようにしている。	リモートやLINEで家族との交流を支援し、画面を見ながら会話を楽しんでいる。昨年、感染が落ち着いた11月に、時間と人数を制限して面会を行った。全家族が面会に訪ずれ、入居者の顔を見て喜んでいた。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者様の性格等を考慮して座る席を決めたり、職員が仲介に入ったりしている。歌を歌ったり、本を読み聞かせたり、数名で一緒に楽しめる物を多く取り入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスが終了した後、他の親族も入居させたいと紹介を受けた事がある。以前入居されていた方のご家族で、施設で不足している古新聞やタオルなどを定期的に持ってきてくださるか方がおり、関係性は継続している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ケアプラン更新の際、アセスメントやカンファレンスを行い、本人本位の視点で検討をしている。普段からご本人の嗜好や性格などを知るよう工夫し、ケアプランに活かせるようにしている。	入居者の行動や顔色などを観察し、落ち着かない様子の方等ソファに座って話を聞いている。帰宅願望の方には居室で傾聴し思いを受け止めている。外出希望の方は、ホーム内を一緒に歩き外の景色を眺めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	実態調査などの段階で生活歴などを確認し、その人らしい生活ができるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	読書を好む人、身体を動かす事を好む人、歌う事を好む人、それぞれの好みを把握し、それに応じて対応している。		
26	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	今年度より、専門職(Ns・PT・OTなど)もカンファレンスに入る事になり、様々な着眼点で話し合う事が出来るようになり、よりよいケアプラン作成が出来るようになった。	通常は半年毎、身体機能低下時は3か月に1回見直している。専門職の助言で、下肢拘縮者の臥床時のクッションの当て方や排便コントロールに、味噌汁や牛乳にオリーブオイルを加える等を計画書に入れた。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々行っているケアの中でも、気づいたことや異変時などにも詳しく記録している。睡眠サイクルの乱れや精神状態の気づきを記録する事でケアの方向性を考える事に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人の状態変化時におけるアセスメント、ご家族とのこまめな連絡などを行い、その都度サービスを検討している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域包括支援センターや他事業所との情報交換を行い、地域資源の把握に努め、入居者様が地域の中で生活していけるような支援が出来るように努めている。		
30	(13)	○かかりつけ医の受診診断 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者様の殆どは往診医にて対応しているが、外部医療機関をしている方には、普段のバイタルが把握できるグラフのコピーや情報提供書を受診時に提出したり、認知症状に係る受診の際には職員が同行し、状態を伝えるようにしている。	協力医が火・日以外の週5日往診に来訪し、緊急時の対応も行っている。歯科医は必要時に往診に来ている。看護師が2名配置され健康チェックや健康相談、医療行為、緊急時の対応をしている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎朝定刻に行う両ユニット合同の申し送りの際、必ず看護師も参加し、状態報告を行っており、看護師の視点からアドバイスを受けたり受診に繋げたりしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の際に病院相談員と連絡をとり、情報共有に努め、ケアマネジャーが病院を訪問し状態確認を行い、入院中及び退院後もどのようにご本人に生活してもらうか検討している。		
33	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化と看取りにおける指針をご家族に説明している。看取り段階に入った場合は、主治医とのムンテラを行い、その後看取りプランを作成し、家族の理解と協力を得ながら看取り介護を行っている。	入居者の状態が変わってきた段階で、主治医から家族に説明があり方針を決めている。1年間で6名を看取った。寝台浴を利用して、最期まで気持ちよく入浴できた。食べたい希望の寿司をみんなの見守りの中で食した。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の研修会を行ったり、不測の事態時の対応をマニュアル化しシミュレーションする事で訓練をしている。		
35	(15)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災委員会が中心となり、火災時の避難訓練や、緊急連絡網の実践訓練などを行っている。	夜間想定火災避難訓練と同日、洪水対応の図上訓練を行った。訓練に参加者が少なかったことや2階ユニットから車いす利用者の非常階段の避難が難しい等の反省があった。町内会長や民生委員の参加は控えた。	ガイドラインの避難訓練を年2回行っていたらいい。2階からの避難方法や安全確保、他事業所との連携、地域住民の参加なども検討をお願いしたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(16)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員から入居者への声掛け等、問題がある場合には、時間を空けず指導を行うようにしている。入居者様の人格を尊重することが大切であることをミーティングの際などに職員に伝えている。	ミーティングで人権やプライバシーの保護について話し合っている。車いす用の共用トイレ使用はドアを閉めるか暖簾で覆い、見守っている。失敗時は周りに知られないよう、耳元で声がけし誘導している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご本人が思いや希望を表した時にはその思いに出来るだけ沿えるよう努めている。思いを表す事が難しい時には選択肢を提案し、自己決定できるよう心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ご本人のペースを大切にしよう、日々心掛けています。食欲がないなら食事の時間をずらしたり、入浴する気分にならなければ日を改めて声を掛けるなど、職員の都合ではなく、本人のペースを重視している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご本人が希望した事に関しては出来る限り思いに沿うようにしているが、意思決定が難しい場合には、身だしなみを整えたり、その方がどういうものを好むのか考えて対応したりしている。		
40	(17)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	月一回程度、おやつレクや昼食レクを行っており、季節の物を皆で一緒に作って食べたりしている。普段は厨房の食事を食べているが、時々行事食が出るので楽しんで食べている姿が見られる。	全事業所の食事は施設内の厨房で作られ、届けられる。魚やトマトなど嫌いな物の代替えが提供される。毎月行事食があり、恵方巻や稲荷寿司、海鮮丼等が供される。誕生会でホットケーキや汁粉を作り皆で楽しんだ。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養士が栄養バランスを考え献立を決めている。咀嚼力や嚥下機能が低下した方に合わせた食形態もあり、状態に合わせて提供出来ている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、全ての入居者様に行っている。自分で出来る方には準備だけ手伝い、自分で口腔ケアを行ってもらい、要介助の方はその方にあった介助方法を検討して対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(18)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ADLが低下した方でも尿意・便意がある場合は安全を考慮した上、二人介助でトイレで排泄をしてもらう。失禁パターンを観察し、トイレ誘導の時間を検討したり、排便コントロールを行うなどして失禁回数を減らすよう努めている。	座位を保てる入居者の意思を確認し、トイレでの排泄を支援している。寝たきりの方は定時にオムツとパッドの交換をしている。朝食後は全員にトイレ誘導することで失禁が少なくなった。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々の排便状況を記録し、検証を行い、看護師と連携して下剤のコントロールしている。下剤を使う前に出来る事が無いのか職員間で相談し、飲み物などで工夫する事もある。		
45	(19)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に応じた支援をしている	基本的には週に2回、曜日を決めて入浴しているが、本人の気分がのらない時などは本人のペースに合わせている。専用の車椅子で入れられる機械浴や、寝たまま入れる寝台浴も完備しており、看取りの方の入浴にも対応している。	入浴予定表通りに定着している。温泉の入浴剤を使うなど入浴を促している。拒否の場合は本人がその気になるよう、洋服などを誉めたり職員を変えたりして誘っている。無理強いせず本人の気持ちを尊重している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ホールで過ごしている時にウトウトしていたら臥床を勧めたりその人のその時々に合わせて対応している。夜、安眠出来るように昼に活動できるよう心掛けている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬情報をファイリングし、全ての職員が確認できるようにしている。どの薬にどんな効用があるのか、薬箱に明記している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	実態調査や入居後の会話などで得た生活歴などの情報は、職員間で共有し、日々の活動や行事、レク等に取り入れて活かしている。		
49	(20)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で外出を気軽に行う事が難しい中でも、1階に併設されている保育園の子供たちの遊ぶ姿を見に散歩したり、気分転換を図るようにしている。車から降りて外食する事は禁止だったが、車から降りずにドライブする事は可能だったため、天気の良い日には出掛ける事もあった。	市内の朝日山公園への花見に、家族も同伴した。仙台空港や千年の丘公園等にもドライブした。散歩には行けなかったがホームの窓から市街地や道路の通行の様子、保育園児の庭で遊ぶ姿などを眺めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理が出来ない方がほとんどなので、職員が預り金を管理している。先月、訪問デパートのイベントがあり、数名ではあったが本人が商品を見て欲しいと思ったものを購入する事が出来た。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご本人から訴えがあった時や必要時など、施設の電話から家族へ連絡する事がある。兄妹から入居者様に絵葉書が届いた際、入居者様に返事を書いてもらい送ったことがある。		
52	(21)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に応じた装飾、花等を飾り、季節感を出すよう心掛けている。ホールに温度も湿度も分かるように温度計を設置し、温度を確認しながら適温になるよう空調の調節を行っている。明るい雰囲気生活できるよう、電気も明るく点灯している。	ホールは照明で明るい雰囲気を出している。壁に鬼の顔の作品を飾っている。入居者同士の雑談やお茶飲み、洗濯物畳み等の作業、ソファやテーブルでの居眠りなど終日ホールで過ごしている方が多い。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ユニットのあちこちにイスやソファを設置し、気の合う方同士で座っておしゃべりを楽しんだり、一人で新聞を読んだり、思い思いに過ごせるようにしている。		
54	(22)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご本人が自室で過ごしやすいよう、ソファを持ってきてもらったり、馴染みの家具を持ってきてもらったり、特に家族様と相談しながら、ご本人が安らげるよう工夫している。	エアコンやベッド、クローゼット、洗面台、トイレが備え付けてある。本棚に蔵書を置いている方やソファ、冷蔵庫、鏡台などを置いている。居室は主に着替えや洗面、職員と話したり、トイレの使用等である。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室前に表札や、折り紙で折った花で目印を付けたりして自分で分かるようにしたり、トイレにも分かりやすく表記したりしている。		

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0491100103		
法人名	株式会社 アイ・ケイ・サポート		
事業所名	カーサ岩沼 グループホーム せせらぎユニット		
所在地	宮城県岩沼市中央3丁目7-16		
自己評価作成日	令和 4年 1月 10日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	令和 4年 2月 7日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

コロナ禍にあり、いつでも外出できるという環境でないことや、面会制限なども原因の一つと思われますが、身体機能や認知機能の低下などが現れた方が見られました。医療機関と連携し、入居者の皆様がいかに生き活きと生活を続けていくことが出来るのか、考えながらケアをしています。薬に頼る前に出来る事はないか、まずはケアの見直しから行うようにし、その人らしさを失う事なく、安心して生活出来る環境作りを目指しています。未だコロナ禍にあるため、感染予防にも力を入れ、心身共に穏やかに生活して頂けるよう努めています。当施設では看護師と24時間連携が出来るという利点を活かし、ご希望があった場合には看取りも行ってまいります。ご本人やご家族の希望をケアに反映させ、心に残る看取りとなるよう、また、住み慣れた場所で穏やかに最期を迎えるためのお手伝いをします。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

JR岩沼駅から徒歩7分ほどの市街地に7階建ての高齢者複合施設(有料老人ホーム、デイサービス、訪問介護、居宅介護支援事業所)の2階にホームがある。感染防止に努め、市内の公園への花見や近郊のドライブで入居者の気分転換を図っている。「事故・虐待防止・身体拘束廃止委員会」を毎月開催し、入居者の安全確保に取り組んでいる。職員同士仲が良く、何でも相談できる環境を作っている。職員は明るく優しい声がけを基本に入居者のケアにあたっている。目標達成計画の「災害時のフローチャートの見直しと職員連携」は達成し、「家族へブログを印刷して届ける」は、今後も継続して取り組むとしている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで身体や精神の状態に応じて満足出来る生活を送っている。 (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、やりがいと責任を持って働いている。 (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者の意思を出来る限り尊重し、外出等の支援をする努力をしている。 (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、医療機関との連携や、安全面で不安なく過ごせている。 (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

2.自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 **カーサ岩沼グループホーム**)「ユニット名 **せせらぎ** 」

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念作成にあたり全職員の意見を反映し、ユニットと事務所に掲示している。常に目に付く所に掲示する事で意識付けを行い、サービス向上に努めている。	ホームの理念「入居者様の気持ちを尊重し笑顔と優しい言葉で接します」を令和2年12月に職員全員で作成した。イライラした時等理念を振り返り、自分が介護される立場に置き換え、ケアに努めている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍にあり、入居者が地域とのつながりを持つことは難しい状況だが、運営推進会議により地域の活動を知る事で、参加出来る機会を模索している。	町内会に加入しているがコロナ禍のため、地域主催の夏祭りや敬老会等の行事は全て中止となっている。ホームと社協共同のカフェも中止している。職員は自主的に毎月清掃活動に参加し地域参加に励んでいる。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍にあり、外部との関わりを積極的に行う事が出来ない事で認知症高齢者に生じる弊害があるという事実を、運営推進会議などで発信し、情報を共有し、出来る事に最善を尽くしている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍で入居者の参加は自粛しているが、会議開催時には事業状況の報告、行事活動の報告を行ったり、家族様や地域包括支援センターや介護福祉課等の意見を聞き、情報交換を行い、良好な事業運営に努めている。	2カ月毎に年6回会議を開催している。うち2回は書面による会議となった。メンバーは町内会長や民生委員、家族、入居者、市職員、地域包括職員である。サロン開催の案内があったが参加は見合わせている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	コロナ禍という事もあり、行政との連携は欠かせない状況。最近管理者が変更となったことや、コロナ禍で積極的に外出が出来なくなったことで身体機能の低下等が見られた入居者様についての相談などを行っている。	市職員からワクチン接種の状況や認知症カフェの情報があった。地域包括センターから介護教室講師の依頼があった。市の担当者に入居者の夜間の暴力行為について相談し、2人体制にして今は落ち着いている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	施設として「身体拘束排除宣言」を表示し、職員にも周知されている。「身体拘束廃止委員会」があり、廃止に向けた取り組みを行っている。年2回の研修会も行っている。	身体拘束廃止委員会を毎月開催し、身体拘束チェックシートでの確認や事故報告等を検討し、議事録を職員に回覧し周知している。グレーゾーンな言葉使い一覧表を職員トイレに貼ってある。「ちょっと待ってね」や「どうしたの」等は使わないようにしている。		
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事故・虐待防止委員会で話し合いを行い、虐待についても、委員を中心に啓発活動を行っている。ユニット内に虐待の注意喚起のため、声掛けの一覧表を掲示したり、注意が必要な声掛けを聞いた時には、すぐに指導する事になっている。	虐待防止の研修会を年2回開催し、虐待とは何か事例を上げ、虐待の弊害や背景予防などを学んでいる。自分の手をたたく入居者にアームカバーで保護したり、「ちゃん」付で呼ぶのはダメなど、防止に取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用している入居者様もあり、月に一度のミーティング等の機会や内部研修会などの際に周知している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約担当者は入念に内容を読み込み、契約に至るまで、パンフレットや料金表などを用いて説明を行い、入居までの流れと入居してからのことを理解してもらい、契約時には更に詳しい説明を行っている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議を通して意見を聞き、ケアに反映できるようにしている。コロナ禍にあり、家族の来設が少ないため、こまめに状態を伝える連絡をし、要望なども聞くようにしている。毎年2月に家族向けアンケートを実施し、意見等を抽出している。	家族アンケート(スタッフの対応・ブログ・改善してほしいこと)の結果、「入居者の様子を知らせて」や感謝の言葉があった。「歩かせて」の要望に、移動時は車いすを使用せず、2人介助で歩行を支援している。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年1回、社長面談を行っており、不安や不満、要望などがある職員が意見を言える環境を作っている。改善できるものに関しては管理者会議などで決議を行い、反映させている。	職員の要望に応じて寝台浴を導入した。入浴介助の負担軽減になった。夜勤回数を減らしたり有給休暇をシフトに入れ、要望に応じている。外部研修への参加は、コロナ禍で見合わせている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課を取り入れ、職員の向上心を高める事に力を入れている。これまでは幹部のみで行っていた賞与額の査定に、職員をよく観察出来る立場にある管理者も加わるようになり、適正な評価が出来るようになっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月、内部研修を行い、出来る限り多くの職員が参加するよう促している。職員の個々の能力や経験年数を考慮し、キャリアパス制度に基づいて評価し、スキルアップ支援制度の利用も促し、積極的に学ぶ機会を作っている。		
14	(9)	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍で外部同業者との交流は難しい状況にあるため、現在は内部の他事業所との交流を行っている。月に一度のリーダー情報連絡会では全事業所のリーダー達が集まり、情報交換を行ったり、機械浴を合同で行うなどで交流している。	法人内のデイサービス、グループホーム、有料老人ホームのリーダーやPT、OT、看護師等が参加し毎月会議が行われ、リーダーの役割など話し合っている。導入した寝台浴の使い方や使用の日程調整を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	実態調査の際にご本人から意向などを聞き、入居前にもご本人に再確認したり、家族様からも意向や要望等を確認している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込みや見学に来た時点で現在の状況を確認して初期段階の信頼関係を構築し、更に実態調査時にご家族の意向・要望などを確認している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	見学、相談に来た時点で、ある程度の情報を聞き、適切なサービスをアドバイスしている。その上で、入居前には詳細なアセスメントを行い、対応を考えている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員と要介護者は対等であり、上下関係で成り立つものではないことを、研修などで発信している。一緒に家事やレクリエーションを行う事で、共に過ごす時間を大切にしている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍にあり、家族様が自由に面会に来ていただく事が出来ない状況だが、だからこそこまめに連絡をする事で家族様に現状を知ってもらい、入居者様本人のことを一緒に考えてもらい、共に支えていく関係を築いている。		
20	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	現在は外部との関わりを行う事は難しいが、本人宛の手紙やハガキが送られてきたら、職員が読んでさしあげ、入居者様本人と手紙の送り主についての思い出話などをする事がある。施設内で検討し、一時的に面会が出来る時期を設け、会って頂くようにしている。	リモートやLINEで家族との交流を支援し、画面を見ながら会話を楽しんでいる。昨年、感染が落ち着いた11月に、時間と人数を制限して面会を行った。全家族が面会に訪ずれ、入居者の顔を見て喜んでいた。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者様の性格等を考慮して座る席を決めたり、職員が仲介に入ったりしている。歌を歌ったり、本を読み聞かせたり、数名で一緒に楽しめる物を多く取り入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスが終了した後、他の親族も入居させたいと紹介を受けた事がある。以前入居されていた方のご家族で、施設で不足している古新聞やタオルなどを定期的を持ってきてくださるか方がおり、関係性は継続している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ケアプラン更新の際、アセスメントやカンファレンスを行い、本人本位の視点で検討をしている。普段からご本人の嗜好や性格などを知るよう工夫し、ケアプランに活かせるようにしている。	入居者の行動や顔色などを観察し、落ち着いた様子の時等ソファに座って話を聞いている。帰宅願望の方には居室で傾聴し思いを受け止めている。外出希望の方は、ホーム内を一緒に歩き外の景色を眺めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	実態調査などの段階で生活歴などを確認し、その人らしい生活ができるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	読書を好む人、身体を動かす事を好む人、歌う事を好む人、それぞれの好みを把握し、それに応じて対応している。		
26	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	今年度より、専門職(Ns・PT・OTなど)もカンファレンスに入る事になり、様々な着眼点で話し合う事が出来るようになり、よりよいケアプラン作成が出来るようになった。	通常は半年毎、身体機能低下時は3カ月に1回見直している。専門職の助言で、下肢拘縮者の臥床時のクッションの当て方や排便コントロールに、味噌汁や牛乳にオリーブオイルを加える等を計画書に入れた。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々行っているケアの中でも、気づいたことや異変時などにも詳しく記録している。睡眠サイクルの乱れや精神状態の気づきを記録する事でケアの方向性を考える事に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人の状態変化時におけるアセスメント、ご家族とのこまめな連絡などを行い、その都度サービスを検討している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域包括支援センターや他事業所との情報交換を行い、地域資源の把握に努め、入居者様が地域の中で生活していけるような支援が出来るように努めている。		
30	(13)	○かかりつけ医の受診診断 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者様の殆どは往診医にて対応しているが、外部医療機関をしている方には、普段のバイタルが把握できるグラフのコピーや情報提供書を受診時に提出したり、認知症状に係る受診の際には職員が同行し、状態を伝えるようにしている。	協力医が火・日以外の週5日往診に来訪し、緊急時の対応も行っている。歯科医は必要時に往診に来ている。看護師が2名配置され健康チェックや健康相談、医療行為、緊急時の対応をしている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎朝定刻に行う両ユニット合同の申し送りの際、必ず看護師も参加し、状態報告を行っており、看護師の視点からアドバイスを受けたり受診に繋げたりしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の際に病院相談員と連絡をとり、情報共有に努め、ケアマネジャーが病院を訪問し状態確認を行い、入院中及び退院後もどのようにご本人に生活してもらうか検討している。		
33	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化と看取りにおける指針をご家族に説明している。看取り段階に入った場合は、主治医とのムンテラを行い、その後看取りプランを作成し、家族の理解と協力を得ながら看取り介護を行っている。	入居者の状態が変わってきた段階で、主治医から家族に説明があり方針を決めている。1年間で6名を看取った。寝台浴を利用して、最期まで気持ちよく入浴できた。食べたい希望の寿司をみんなの見守りの中で食した。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の研修会を行ったり、不測の事態時の対応をマニュアル化しシミュレーションする事で訓練をしている。		
35	(15)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災委員会が中心となり、火災時の避難訓練や、緊急連絡網の実践訓練などを行っている。	夜間想定火災避難訓練と同日、洪水対応の図上訓練を行った。訓練に参加者が少なかったことや2階ユニットから車いす利用者の非常階段の避難が難しい等の反省があった。町内会長や民生委員の参加は控えた。	ガイドラインの避難訓練を年2回行っていたらいい。2階からの避難方法や安全確保、他事業所との連携、地域住民の参加なども検討をお願いしたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(16)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員から入居者への声掛け等、問題がある場合には、時間を空けず指導を行うようにしている。入居者様の人格を尊重することが大切であることをミーティングの際などに職員に伝えている。	ミーティングで人権やプライバシーの保護について話し合っている。車いす用の共用トイレ使用はドアを閉めるか暖簾で覆い、見守っている。失敗時は周りに知られないよう、耳元で声がけし誘導している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご本人が思いや希望を表した時にはその思いに出来るだけ沿えるよう努めている。思いを表す事が難しい時には選択肢を提案し、自己決定できるよう心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ご本人のペースを大切にできるよう、日々心掛けています。食欲がないなら食事の時間をずらしたり、入浴する気分にならなければ日を改めて声を掛けるなど、職員の都合ではなく、本人のペースを重視している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご本人が希望した事に関しては出来る限り思いに沿うようにしているが、意思決定が難しい場合には、身だしなみを整えたり、その方がどういうものを好むのか考えて対応したりしている。		
40	(17)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	月一回程度、おやつレクや昼食レクを行っており、季節の物を皆で一緒に作って食べたりしている。普段は厨房の食事を食べているが、時々行事食が出るので楽しんで食べている姿が見られる。	全事業所の食事は施設内の厨房で作られ、届けられる。魚やトマトなど嫌いな物の代替えが提供される。毎月行事食があり、恵方巻や稲荷寿司、海鮮丼等が供される。誕生会でホットケーキや汁粉を作り皆で楽しんだ。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養士が栄養バランスを考え献立を決めている。咀嚼力や嚥下機能が低下した方に合わせた食形態もあり、状態に合わせて提供出来ている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、全ての入居者様に行っている。自分で出来る方には準備だけ手伝い、自分で口腔ケアを行ってもらい、要介助の方はその方にあった介助方法を検討して対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(18)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ADLが低下した方でも尿意・便意がある場合は安全を考慮した上、二人介助でトイレで排泄をしてもらう。失禁パターンを観察し、トイレ誘導の時間を検討したり、排便コントロールを行うなどして失禁回数を減らすよう努めている。	座位を保てる入居者の意思を確認し、トイレでの排泄を支援している。寝たきりの方は定時にオムツとパッドの交換をしている。朝食後は全員にトイレ誘導することで失禁が少なくなった。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々の排便状況を記録し、検証を行い、看護師と連携して下剤のコントロールしている。下剤を使う前に出来る事が無いのか職員間で相談し、飲み物などで工夫する事もある。		
45	(19)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に応じた支援をしている	基本的には週に2回、曜日を決めて入浴しているが、本人の気分がのらない時などは本人のペースに合わせている。専用の車椅子で入れられる機械浴や、寝たまま入れる寝台浴も完備しており、看取りの方の入浴にも対応している。	入浴予定表通りに定着している。温泉の入浴剤を使うなど入浴を促している。拒否の場合は本人がその気になるよう、洋服などを誉めたり職員を変えたりして誘っている。無理強いせず本人の気持ちを尊重している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ホールで過ごしている時にウトウトしていたら臥床を勧めたりその人のその時々に合わせて対応している。夜、安眠出来るように昼に活動できるよう心掛けている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬情報をファイリングし、全ての職員が確認できるようにしている。どの薬にどんな効用があるのか、薬箱に明記している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	実態調査や入居後の会話などで得た生活歴などの情報は、職員間で共有し、日々の活動や行事、レク等に取り入れて活かしている。		
49	(20)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で外出を気軽に行う事が難しい中でも、1階に併設されている保育園の子供たちの遊ぶ姿を見に散歩したり、気分転換を図るようになっている。車から降りて外食する事は禁止だったが、車から降りずにドライブする事は可能だったため、天気の良い日には出掛ける事もあった。	市内の朝日山公園への花見に、家族も同伴した。仙台空港や千年の丘公園等にもドライブした。散歩には行けなかったがホームの窓から市街地や道路の通行の様子、保育園児の庭で遊ぶ姿などを眺めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理が出来ない方がほとんどなので、職員が預り金を管理している。先月、訪問デパートのイベントがあり、数名ではあったが本人が商品を見て欲しいと思ったものを購入する事が出来た。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご本人から訴えがあった時や必要時など、施設の電話から家族へ連絡する事がある。兄妹から入居者様に絵葉書が届いた際、入居者様に返事を書いてもらい送ったことがある。		
52	(21)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に応じた装飾、花等を飾り、季節感を出すよう心掛けている。ホールに温度も湿度も分かるように温度計を設置し、温度を確認しながら適温になるよう空調の調節を行っている。明るい雰囲気生活できるよう、電気も明るく点灯している。	ホールは照明で明るい雰囲気を出している。壁に鬼の顔の作品を飾っている。入居者同士の雑談やお茶飲み、洗濯物畳み等の作業、ソファやテーブルでの居眠りなど終日ホールで過ごしている方が多い。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ユニットのあちこちにイスやソファを設置し、気の合う方同士で座っておしゃべりを楽しんだり、一人で新聞を読んだり、思い思いに過ごせるようにしている。		
54	(22)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご本人が自室で過ごしやすいよう、ソファを持ってきてもらったり、馴染みの家具を持ってきてもらったり、特に家族様と相談しながら、ご本人が安らげるよう工夫している。	エアコンやベッド、クローゼット、洗面台、トイレが備え付けてある。本棚に蔵書を置いている方やソファ、冷蔵庫、鏡台などを置いている。居室は主に着替えや洗面、職員と話したり、トイレの使用等である。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室前に表札や、折り紙で折った花で目印を付けたりして自分で分かるようにしたり、トイレにも分かりやすく表記したりしている。		